

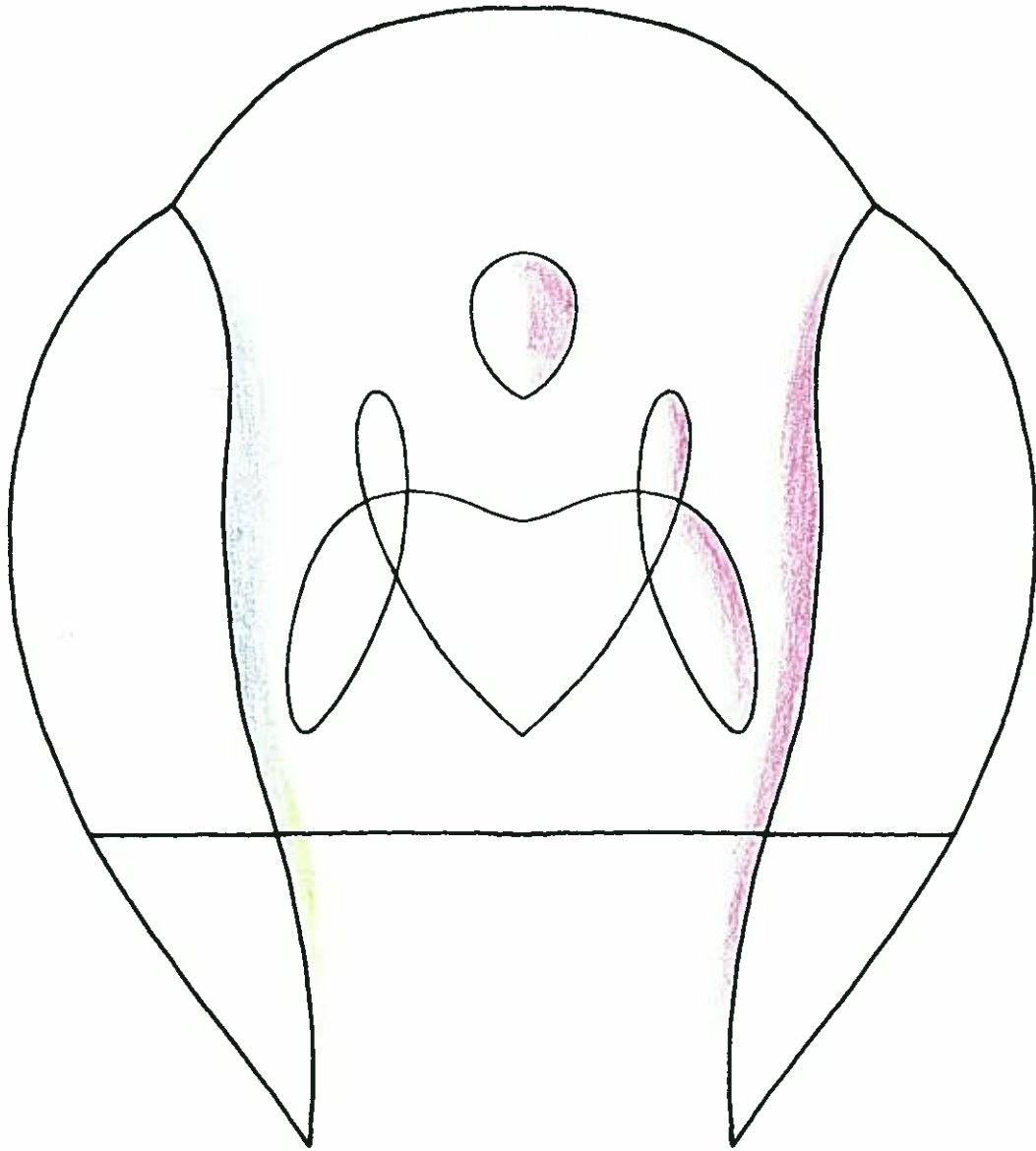
V

I

2007 Autumn
Glass Culture Paper
Vol.001
By Koa Glass

N

何度も生き還る地球の恵み、ガラス。



私は三面鏡。

あなたはいつも同じあなたなのに、

昨夜のパーティーで疲れた朝、

満ちたりた眠りの朝、

電話で眠れなかった朝……

あなたは毎日変化する。

その様子を素直に伝えるのが私の役目。

あなたは毎日私の前で、

いつもの化粧ビンを手にもち、

同じステップで手のひらを動かし、

いつもの輝きをとりもどす。

それを見つめて、

メッセージを送るのが私の役目。

あなたはうなずき、今朝も元気に

ドアの向こうへ行く。

あなたは私のレギュラーゲストです。

3億本の実力－醤油と容器

約半世紀にわたり日本文化伝道の一役を担い、海外でもその健在ぶりを誇っているデザインがある。今日の日本食ブームを支える「醤油」の容器である「卓上びん」がそれである。そのフォルムは女性の優美さをイメージし、「注ぎのセオリー」から生み出された機能性を兼ね備え、この47年間変わることはなかった。

「若きデザイナー」と「若い醤油屋さん」のグループによる100にもおよぶ試作の結晶である。この約半世紀の間に3億本以上の生産と出荷におよぶそうだから、これはこれでまた驚嘆することがらである。今や、海外の「日本食レストラン」では、グローバル化したこの「卓上びん」や「醤油さし」が、ごく「普段着の顔」をして出て来る。「むらさき」の異名の由来となった「赤紫」の「色」、JISで規格化されている「旨み」、バラを含め300種の香りの成分を含む「高い香り」。この三つの要素が日本人をノスタルジアに浸らせる「源」であり、どうやらこれらが私たちのDNAに組み込まれているらしい。

さて、この醤油のルーツはというと、アジアの共通の「醤（ひしお）」にたどり着き、日本では縄文時代、大和朝廷時代を経て穀物の塩漬けを熟成させた「殺醤」が本格化した。下って鎌倉時代の径山寺（きんざんじ）の系譜を継ぐ味噌造りの「溜り」の発見が今日の醤油の原型になったようだ。だが、醤油が大量生産されるようになったのは江戸時代からで、それまでの「壺」や「甕」に替わって素材の加工性と「醤油」の安定生産のために専ら「杉樽」が使われるようになり、「徳利」に小分けされ、一般庶民にもいきわたるようになった。醤油はそもそも、麹、乳酸菌、酵母を用いて醗酵

させて製造されるので変質しやすく、古来より容器が重要な役割を担ってきた。たとえば同じ江戸時代に、



東インド会社のオランダ人は醤油輸出用に樽と共に当時の日本人仲買人組合のポルトガル語名を冠した陶器製の「コンプラびん」を用いていた（コンプラはポルトガル語で仲買人）。当時、オランダ人は品質劣化を防ぐため醤油を煮沸し、栓をしてタールを塗るという独特な工夫をしてヨーロッパまで運んでいたのだ。

今日、大手醤油メーカーでの醤油の変色テストでは「コンプラびん」などの磁器や陶器は1ヶ月でかなり変色し、樹脂でも1年半程度が賞味期限で、ガラスの2年程度に比較すると短いという結果だ。1400-1500度の高温で溶解され成型されるガラスの緻密さが、容器を透過する酸素の活動を抑えている。「透明感」、「輝き」、「質感」などの良さと共に物性的なガラスの安定性がここでは働いている。さらに時は移り、大正時代に入ると自動製びん機が導入された。以降日本での産業としてのガラス容器製造が本格化し、一升びんが現れ、1950年代

に「卓上びん」の採用が進み、「徳利」の時代は終わった。一方、自動化が進む中、半人工と呼ばれる工芸的な製びん方法も継承され、健在である。「醤油さし」は細々とはあるが江戸川区や墨田区といった東京の下町をはじめ各地で生産され続けている。今でもヴェネツィアと同じく専門職人の技に頼っており、埴塙（るつば）から取り出したガラスの「タネ」をクルクルと「廻し」形にし、押し型で仕上げてゆく伝統の技はなかなかのものだ。

「天然木」から「陶磁器」、そして「ガラス」へと変遷してきた醤油の器であるが、その「色」、「味」、「香り」を保ち、活かすガラスの役割はここでも健在である。我々の「化粧用びん」でも内容物が保存状態によって影響されやすいものに対し新たな役割を果たす機会が増して行くだろう。

人の心は顔に表れ、顔に表れた心を鏡で見る。
その鏡の中の顔を見てみると心が動く。
鏡と言う光の反射のツールは心の奥まで反射してくる。

お化粧をする女性にとってやはり「鏡」は必需品。その「鏡」も基本は「ガラス」。同じガラス仲間であるが、取り組んでみて分かったことだが、これまた新しい世界が開かれている。質の良いガラスに金属の反射面を備えていると言う極めてシンプルなものであるが、なかなか奥は深い。そしてこの「仕掛け」は光の反射という物理現象をとおして、3次元の立体世界を2次元の平面に変えてしまう不思議なツールだ。この不思議なツールは古来、多くの人々を魅きつけ、虜にしてきた。鏡にまつわるエピソードは女性を語る代名詞のようにいつも、豊かな想像力の世界に人々を誘う。

「表紙のデザイン」は鏡に向かう女性。
この女性はいくつか鏡と何を語り合っていくのだろうか。「鏡よ、鏡。この世で一番美しいのは…」でもあるまいから。

三面鏡ひと模様

マリー・クリスチース・デン・ブロック・ド・ブルナン
(フランス)

パリ・ブローニュの森と隣り合わせた、瀟洒で閑静なアパートマン。インターホンを押すと、声とともに、カチッとドア鍵が開く。入ったフロアの壁には巨大な鏡がある。三階へ上がる階段壁面にも大きな絵があり、玄関ドアを入ると正装した美人画が迎えてくれた。「この絵は主人の祖母です」。ブルーの半そでシャツにスラックス姿の、マリー・クリスチース・デン・ブロック・ド・ブルナンさん（65歳）が、しなやかで軽い身のこなしで居間に案内してくれる。テーブルと布張りソファセット二組と、椅子が九脚のサロン風居間。奥にも部屋がいくつもある広い住まいだ。

1984年、日本に草花研究で一ヶ月滞在し、深く感心を持った。89年には日本とフランスの親睦団体「SUZUKAKE NO KAI」に入会。2000年には、二ヶ月間にわたって北海道の礼文島、利尻島から沖縄の沖縄、与那国島まで回った。書道も習って、書道展に出すほどの日本ファン。さらに「コーヒーは飲まない。いつも玄米茶か日本茶です」と笑う。生き方信条は「心地よく生きること」。だから、日本人の繊細さがよく分かり、それを表現している日本の草花が好きで、それらを生活の中に取り入れているのだ。

朝、起床後30分間、気道という精神の調和を求めるストレッチ運動をする。



普段と反対反対の動きをするもの。その後にスプレーウォーターと保湿クリームで肌を整える。これが一回目の化粧。二回目は外出時やレストランへ行く時、ファンデーションとシャドウと口紅で化粧する。さらに、三回目の化粧はパーティに行く時。目の周りや髪をセットし、香水をつける。日本製の香水「禪」が大好きで20年間使っている。外出予定のない日は、居間から専用のらせん階段で屋上庭園に出る。そこは、陽光と緑、鳥の羽音とさえずりの世界だ。松、竹、梅、桜の木々に加えて、みょうが、さんしょ、ゆず、三つ葉、しそ、金柑、トマト、にんじんなどの野菜や草花が、雑然としつつも絶妙の和を保っている。それらが風に揺れ、耳に囁いてきて、作業する心を和ませる。俗念を放り投げさせ、気持ちよさだけのこす。本当に心地よい。

いつも思うのだが、このような心地よさは、朝起きて、朝食、気道そして化粧するプロセス、特に、鏡で見る自分から発生している。一日のはじまりにあたって、体調を肌状態から確認するのだ。

昨日は快調だった。13時から20時まで、夕方の激しい雷と豪雨の時も合羽を被って作業したが、疲れはない。一回目の化粧で、鏡の中の自分を確認できたからだと思う。朝の化粧が心地よさにつながる最も大事なときだと思っている。



ソーダ石灰ガラス	成分	地殻
74 %	SiO ₂ (珪石)	65 %
1 %	Al ₂ O ₃ (酸化アルミニウム)	10 %
9.5 %	CaO (石灰石) MgO (酸化マグネシウム)	12.5 %
15.5 %	Na ₂ O (ソーダ灰) K ₂ O (酸化カリウム)	6 %
0.03 %	Fe ₂ O ₃ (酸化鉄)	6 %

「ソーダ石灰ガラス」と地球の地殻（地表から約40kmの深さ）の代表的な成分を表に纏めたものです。意外と近い成分であることがわかります。「環境に優しいどころか、地球そのものだ。」はこれを根拠としています。



漸進なレストランに立ち寄ってみると「ごく、当たり前のこと」なのだが陶磁器、銀製の器と共にガラス容器に注がれたり盛り合わされたりして飲み物や料理が出てくる。そこには、伝統と格式に裏付けられた世界がある。品の良い器は「客へのもてなし」の一部なのだ。そしてその「もてなし」は肅々と受け継がれ、私たちに喜ばせ、料理と共に、店の伝統となる。「良い器に出会う」ことは、「良い料理、良い人」に出会うことと同意語なのだ。容器を作る者の「冥利」もここにある。だが、ガラス容器を作る者としてさらに誇りに思っていることがある。それは私たちの造るガラスの主要な成分が地球のそれとほぼ同じであるということだ。

少し意外に聞こえるかもしれないが、私たちが製造しているガラス容器や窓ガラスは世界中で最も広く使われており、「ソーダ石灰系」ガラスと呼ばれるが、「珪砂」、「石灰石」、「ソーダ灰」、「アルミナ」などを主成分としており、地球の地殻とほぼ同様な成分構成となっている。「地球環境に優しい」という言葉があるが、ガラスは地球そのものなのだ。ガラスが誕生したのは古代メソポタミアの地とされている。青銅などの製造の折に、地面や溶融窯に含まれていた自然の成分が高温下で溶け出し、偶然に造られ、人によって発見されたのだ。その点からも、まさに自然の「申し子」と言えるだろう。

このように4000年前、かの地で偶然の産物として生まれたガラスであるが、その「透明感」や「輝き」は、かの地の支配者だけでなく、時と地域を超え、多くの支配者を魅了し続けてきた。ガラスは「権威の象徴」であり、身を飾る「宝飾品」としての地位を確実に築いてきたのだ。そして、その華麗なガラスの「宝物」は代々受け継がれ使用されてきた。その希少価値故にびんの製法は秘密とされ、伝統的にヴェネツィアの地ムラーノ島で長く技法は温存された。15世紀から16世紀にヴェネツィアガラスは黄金期を迎える。やがてヴェネツィアの政治経済の地位の衰退とともに技法は広く欧州各国に散っていった。この頃には「高級容器」や「装飾品」として用途の広がりを見せるようになっていた。そして徐々に一般大衆の手にも「高級容器」や「装飾品」として届き始めていた。そしてまた職人の手から、芸術家の手にもゆだね

ガラスと環境

られるようになっていた。特に19世紀から20世紀に花開いた「アール・ヌーボー」や「アール・デコ」の芸術家たち、たとえば「エミール・ガレ」（1846-1904）や「ルネ・ラリック」（1860-1945）の作品は今日の我々を魅了して止まない。あの過去の支配者たちが求め続けた「美」の世界がそこにはある。我々、ガラスを生業とする者、特に化粧品容器の製造に関わる者は、おおよそ、この「美の系譜」を継承するに足る末裔たらんと腕を磨くのである。

一方、1500度の「火」の芸術品でもあるガラスは当時ヴェネツィアでも「濃紺」、「緑」、「赤」、「淡紫」の色付けに用いた酸化金属に希少価値があり、安定した原料入手の困難さも手伝い、早くから屑ガラスの再利用が行われた。今日で言う原料としての廃ガラスの「リサイクル」である。このようにガラスの「リサイクル」や「リユース」は、その長い歴史と伝統の中で人々の自然な営みとして培



われ、根付いてきた。今日さらにびんの「軽量化」、つまり「リデュース」と合わせこれら3つの言葉の英語の頭文字の「R」を採って、「3R」運動として世界的にも「ガラスの環境運動」として知ら

れるようになった。1997年には容器包装リサイクル法が制定され、この様な運動に拍車をかけることとなった。1998年にはカレット（廃ガラスを砕いて原料としたもの）使用比率が70%を、2003年には90%を超え高水準のガラスの「リサイクル」が実施されるようになった。欧州でもドイツを筆頭にベルギー、オーストリア、などが90%前後の高い水準を維持している。このガラスの「リサイクル利用」により溶解エネルギーを節減でき、環境負荷炭酸ガス発生量を大幅に抑制できているのだ。



「母なる地球の恵み」を「ガラス」という形で受け継いできた私たちはもっと、もっと、その恩恵を「人類の文化遺産」として生かして行かなければならないと痛感するのである。



興亞硝子株式会社

<http://www.koaglass.co.jp/>

2007年9月1日

第2回程度発行予定

出版責任 営業本部

次号は2008年3月を予定しています